



第86回定期演奏会 - 2003年6月6日(金) ザ・シンフォニーホール - (写真提供: 大阪市音楽団)

日本のオーケストラ運動 高揚のお手伝いを

大阪市音楽団特別指揮者・芸術顧問

大阪市民の楽団として親しまれている大阪市音楽団が、今年創立80周年を迎えている。1923年(大正12年)に大阪市民の楽団として誕生した、日本で最も長い歴史と伝統を誇るプロフェッショナルの交響吹奏楽団であり、我が国で唯一、自治体が運営する楽団である。

大阪城公園内に本拠を置き、世界的な指揮者や演奏家をゲストに招い

ての「定期演奏会」や、吹奏楽を愛するファンのための「吹奏楽フェスタ」のほか、満開の桜に囲まれての「スプリングコンサート」、警察、消防、学校など各種団体も出演する「たそがれコンサート」などを開催。その演奏の質の高さは73年度から3度の大阪文化祭賞のほか、日本民間放送連盟賞(88年度)はじめ日本吹奏楽アカデミー賞演奏部門賞(93年

度)、大阪芸術賞(97年度)などの受賞暦が物語っている。

さらに小学生、幼稚園児のための音楽鑑賞会や、中学・高校生を対象とした吹奏楽講習会や、一般市民向けの市民音楽教室など、大阪市民の情操教育や音楽文化向上のための活動も幅広く展開する一方、近年はシンフォニック・ウインド・レパトリーの拡充に努め、自主制作の「ニュー・ウインド・レパトリー」シリーズ、ライブCDなど新譜CDの収録を続けている。

こうして創立80周年を迎えた大阪市音楽団が、演奏内容の充実と発展を目的に今年4月から「特別指揮者・芸術顧問」として招いているのが、秋山和慶さんである。

秋山さんは、東京交響楽団の音楽

プロフィール 秋山 和慶(あきやまかずよし)さん

1941年、東京生まれ。母親の影響で幼児期からピアノに親しむ。桐朋学園大学音楽学部で斎藤秀雄氏(故人)の指導による指揮法を修め、卒業翌年の64年2月に東京交響楽団を指揮してデビュー。68年には、同団の音楽監督・常任指揮者に就任し現在に至る。この間トロント交響楽団を皮切りにアメリカ交響楽団、バンクーバー交響楽団(現在桂冠指揮者)ロスアンジェルス・フィル、ボストン交響楽団などアメリカ、カナダを中心に活動。さらにケルン放送交響楽団、スイス・ロマン管弦楽団などヨーロッパでの活動も顕著。受賞はサントリー音楽賞、芸術選奨文部大臣賞、大阪府民芸術賞など多数。バンクーバー在住。

監督・常任指揮者を39年間続けるかたわら、アメリカやカナダのほかヨーロッパでも客演などで活躍。特に北米での演奏実績は高く評価され、いまや、大学の先輩の小澤征爾さんに次ぐ世界的な指揮者である。

大阪市音楽団特別指揮者への就任を決めた心境を、秋山さんは言う。「大阪市音楽団は、日本のシンフォニックバンドの草分け的な存在で、技術的にも我が国最高峰にあるバンドですね」と前置きして「でも、こういうのって相性があるんです。その点、客演（01年5月、02年11月の定期演奏会）をやらせていただいたときから非常にいい演奏会ができて、皆さんにも喜んでいただいて。それでお話をいただいたのですが、僕もウインドオーケストラは興味があったものですから、喜んでお引き受けしました」と。就任以降すでに6月の「第86回定期演奏会」と、8月の「たそがれコンサート」でタクトを振っており、来年2月には自主制作CDのレコーディングも決まっている。

3歳からピアノ 『絶対音感』持つ少年

東京生まれの秋山さんは、自宅でピアノを教えていた母親の影響を受け「3つぐらいからピアノを弾いていた」という。「と言っても無理やりじゃなく、音楽を楽しむ感じでした。家族も親戚も音楽好きでしたから」という環境のなかで秋山さんは、幼少の頃に『絶対音感』を身に付けるのである。ちなみに絶対音感とは、ある音（車のクラクションや雨垂れ

の音など）を聞いて、ピアノの何の音かが分かる、あるいは楽器がなくても、その音を出せといわれれば、何の音でも正確に出せるという特殊な能力のことだ。

秋山さんが中学3年生の某日、進学を希望していた桐朋学園で行われたオーケストラの演奏会に出掛けた。演奏は同園の高校・大学生。指揮者は当時大学2年生の小澤征爾さんだった。「それはもう感動的な演奏会で、たいへんなカルチャーショックを受けました」。この演奏会が、ピアノ一筋だった秋山さんを、「ラッパでも太鼓でもいいからオーケストラでやりたい」と決心させるのである。

演奏会終了後、小澤さんと面会する機会があった。そこでのアドバイスは、「高校はピアノ科で入学し、指揮も勉強して小澤征爾に続く指揮者を目指せ」というものだった。絶対音感を持つ少年、秋山和慶の名は、この時すでに音楽関係者に知られていたのである。翌年、桐朋学園高校に入学する。

3年後、高校（ピアノ科）を終えた秋山さんは大学の指揮科へ進学し、専門教育を受けることになる。斎藤秀雄教授（故人）から、どういう手の出し方をすれば出るのか やめる のか。速く、ゆっくり、大胆に や 繊細に など、演奏者が一目で理解できるモーション“斎藤メソッド”の訓練を受けた。同時に作曲や楽譜の読み取りなどのカリキュラムに加え、ピアノのほか副科としてホルンや打楽器の実技もこなさねばならなかった。

卒業と同時に大学助手に 東京交響楽団指揮者にも

卒業と同時に、斎藤教授の助手として教職に迎えられる。しかも直後に東京交響楽団から就任の打診があり、翌年2月、23歳で専属指揮者に就任するのである。「東京交響楽団は、僕が小学生のころから家族中が会員で、ずっと演奏会に通っていたんです。そこから招かれることになって天にも昇る気持ちってというか、うれしかったですね」と秋山さん。以後39年間、指揮者として東京交響楽団にかかわっており、桐朋学園では特任教授として教職も続けている。

ところで、楽団員とのコミュニケーションや、自身のストレス解消のため、秋山さんは演奏会やりハースルのあとよく飲みに出かけるという。とはいえ、何十人もの演奏のプロを“その気”にさせる指揮者だけに、ふりかかるストレスは相当なものだ。ストレス解消のため、もうひとつ続けているのが鉄道模型だ。「そうなんです。自動車とか電車が好きで、鉄道の写真をとったり、乗りにいったり（笑）。90年に、岐阜県の樽見鉄道に蒸気機関車の“オーケストラ列車”を走らせ、有名な淡墨桜のある公園で野外演奏会を実現したほどのマニアである。

来年、在籍40年を迎えるのを機に、東京交響楽団の音楽監督を退き、桂冠指揮者となる。一方で広島交響楽団に続いて、4月から九州交響楽団の常任指揮者にも就任する。「東京から距離のあるところでも、若い人達のオーケストラに対する熱意がすごく高まっているのです。今後は、地方からも日本のオーケストラ運動を高める強い発信をする、そのお手伝いをしたい」と秋山さん。72年から家族と共に住むバンクーバーとの往来が、ますます回数を増しそうである。

（文・脇本 勤 / 写真・高島悠介）

♥ 大阪文化祭参加 第87回大阪市音楽団定期演奏会チケットプレゼントあり。詳細は23ページ。



「2003年たそがれコンサート」練習風景 - 音楽団事務所 -